

漸近線の誘惑

—科学的心理学の意味について—

Temptation of an Asymptote: On the Meaning of Scientific Psychology

川津 茂生 KAWAZU, Shigeo

● 国際基督教大学教育研究所
Institute for Educational Research and Service, International Christian University

Keywords 心理学, 論理, 計算, 言語, 西田幾多郎, 時枝誠記
psychology, logic, computation, language, Kitaro Nishida, Motoki Tokieda

ABSTRACT

科学的心理学は科学的な方法での人間の心と行動の解明を目指す。それは、漸近線が曲線に接近しようとするのに類似して接近しはするが、本来の人間存在に触れることが出来ない。脳が計算をしているとみなして、計算論的に説明することは、本来的には「無関係性」を基調とする「それ自体」としての物質世界から「関係性」を本質とする生命や人間存在を説明することになり、不可能な試みである。それに対し、根源的な関係性を想定するなら、原初からの受容性としての超越的存在が在るとしなければならぬ。それが論理や計算を根本的に支えるのである。その具体的なモデルとして言語を取り上げる。西田哲学の「場所」と時枝誠記の「場面」を結びつける中村雄二郎の考察を踏まえた上で、言語の広がり主語的同一性の論理をも論理以前の根源的な関係性をも表現できることを確認し、そこから言語が論理を越えて、論理と関係性の双方を包摂するモデルとして成立することを論じる。

The way scientific psychology tries to solve the problem of human mind is just like the way an asymptote tries to come close to a curve. Though it comes close to it, it never touches the mind itself. The notion of the brain as a computer reflects a misconception that the mind as a basically relational existence can be explicated on the basis of the physical world which does not possess any radical relational nature in itself. As the very basis of even the physical, logical world, there must be the most profound transcendental Being that gives the most basic relationship as positive affirmation of everything. Language can provide an inclusive and comprehensive model for both logic and relationship. Language as a model may become a new

metaphor for psychology and even for philosophy that could substitute computer as the now seemingly omnipotent metaphor for the mind and other existing entities.

1. 曲線的生命への漸近線としての心理学

外からの引力がない死せる空間を、ある物体が慣性によって移動するとき、その軌跡はどこまでも続く直線となる。もしそこに優美な曲線を描くものが現れれば、それは生命の香りを放つだろう。死せる直線が生ける曲線に漸近して、生命の柔らかな輪郭をなぞろうとしても、それは死の欲望に過ぎず失敗に終わることは間違いない。

思考を模倣するチューリングマシンは、飛び飛びのステップを踏む。その姿はオートメーション工場でのメカニカルな作業に似ている。その在り様を図示したイラストは、多くの教科書に載っている。計算とはいわば直線なのであり、短い直線を繋いだ折れ線グラフのようなものだ。デジタルであることは活きた曲線を再現できない。直線に過ぎない漸近線が曲線にどれほど接近しようともそれに一致出来ないように、デジタルな計算が生命を模倣しようとするのは、届き得ない彼岸へ手を伸ばそうとする虚しい願望である。曲線は自由に生きるが、直線は自由を喪失している。

生命の歓びを見失った現代人が、コンピューテーションによって絡め取られてしまうことを願うのは、生命を忘却することへのニヒルな憧れなのであろうか。

あるロボット研究者も報告するように（藤田，2007），現代では人間の感情すら計算論的に解明し、ロボットにも感情を持たせようとする研究もある。しかしたとえば、ゲーテの恋を計算論的方法で説明しても、彼の恋の本質がそこにあるとは考えられまい。科学的説明は生命を持たない折れ線のスケッチなのであり、それは直線的硬直に留まったままである。直線的な計算から活ける曲線のゲーテに漸近しようとするのは、七夕の夜の彦星がどんなにしても織姫に触れられないように、生命に漸近することしかできない夏の夜の夢だ。計算という漸近線は絶望的に生命を目指す。しかしそれは漸近することしかできない。

計算するシステムが生命の非決定論を模倣して、確率論的な計算を導入してみても、根本的な事情は変わらない。生命は単なるランダムさを越えて目的へと向かうが、下に述べるように、それが維持しようとする生命の一貫性は科学的説明をも越えた一貫性なのである。

失恋を説明してみたとしても、そのゆえに滝壺に身を投じる青年からは乖離している。科学的な説明が魅力的なのは、それが現実には漸近して行く在り様が、もう少しで本当に現実を言い当てるかのように見えることによるのであろう。分かり易い説明は人を誘惑する。分かったと思えると安心できる。もうこれ以上考える必要がないからである。これ以上苦しい思考を続けなくてもよいと思えることが、知性を麻薬のように痺れさせる。

2. 意識は同一性を越える

山本周五郎は『柳橋物語』（山本，1964）の冒頭で、娘おせんが、上方へ旅立つ直前の庄吉から自分への思いを告げられ、「待っていて呉れるか」問われた、その直後の彼女における江戸の街並みの変貌を次のように描写した。

「庄吉と逢ったわずかな時間、庄吉から聞かされた短いその言葉、その二つが彼女のなかに眠っていた感情と感覚をいっぺんによび醒ましたのである。街の家並もたそがれのあわただしい景色も、常と少しも違っていないのだが、今のおせんにはびっくりするほど新しくもの珍しいように見え、こんなにしっとりしたいいい町だったのかと見なおすような気持だった。」（山本，1964，pp.14-15）

おせんの場合のように現象は経験の中で変貌するのである。彼女の世界はほんの短い時間の経験で大きく変わった。それはもちろん当然、関係性の中で変わったのである。おせんは庄吉との関係、世界との関係性に生きていた。もしこれが現実であれば、おせんの脳内にそれに伴う神経生理学的

な変化があるはずである。

人がアナログ時計に目を向けた瞬間に、針の動きがいつもよりゆっくり動くように見えるという現象は、多くの人を経験する。この現象の背景に何らかの神経生理学的なプロセスがあるのは明らかで、心理学者はそのメカニズムの解明を目指す。また月の錯視では、地平線上の月は天頂の月よりも大きく見えるが、月の両端から眼球への光線が作る視角は、月の位置に関わらず同じであるから、この錯視を幾何学に説明することはできない。その背景には脳内のメカニズムがあるに違いない。

おせんの経験の変貌も錯視を含めた知覚現象も、その背景に脳内の神経生理学的な情報処理があるのは当然のことなのではあるが、それらは同時に生命的な関係性の現象でもある。それは経験する主体と世界との関わりの現象なのである。その生命的な関係性を脳内の情報処理という物質的な水準である「無関係性」の世界から説明し切ることができるのであろうか。

3. 生命・意識・関係性

物質的世界の法則の解明を目指す物理学は、自然をそのままに解明しているのであろうか。自然は「それ自体」としては一つのまとまりを持った全体である。それは外部との関係を本来的には持たない。自然の内部にさまざまな関係性があるのだとしても、自然は基本的に「それ自体」として存在している。

物理的な自然では関係性をもっとも根源的な事態ではないのである。したがって、自然法則に基づき、その上に関係性を構築してみたとしても、それは本来的には「無関係性」の世界からの副次的構成に過ぎない。

自然科学の発展の流れの中で、心理学が人間の関係性を科学的な方法で解明できるとしたのは、基本的には「無関係性」の物質的世界から、進化によって生命的関係性が出現してきたのだという前提に基づいている（デネット、2018）。

しかし関係性は本来言葉で表現されるものである。現実の出来事の中に関係性の真理を見出すの

は、言葉による。たとえば旧新約聖書の真理観では、歴史の中で関係性の真理が言葉として出現する。超越者に向かい合って生きることで、言葉が関係性の真理として現れ出る。そこでは、世界も自然も「それ自体」としての存在とは考えられていない。世界には超越的外部への開けがあるのである。世界と自然がそれを越えた領域へと開かれている。

それと相違して、関係性が基本ではない自然科学によって、関係性を自然的世界から再構築してみても、それはやはり副次的な意味での関係性なのだと考えざるをえない。

歴史の中の偶然的な出来事は、合理的な解釈を拒絶する。現実には偶然性と必然性の絡み合いだが、現実を法則的必然性だけで理解しようとすれば、偶然性の意味は見えない。けれども現実世界の存続は偶然性によっても可能になっているのであるから、偶然性の意味は問わねばならない。ところが、偶然性をも含めた上で世界の意味を問うことが可能になるのは、意味の探求が世界を越えた領域へと開かれている場合だけなのである。

現象学が指摘したように、意識は志向性という関係性を持つが、心理学が根本的に「無関係性」の物質的世界に基づいて意識の志向性を説明するとするなら、それは「無関係性」からの関係性の説明になる。関係性としての志向的を「それ自体」として在る自然の「無関係性」から説明できるという信念を、心理学者はどこから手に入れたのであろうか。

まったく逆方向への思考もあり得るのではないだろうか。すなわち、物理的世界の始原において根源的關係性が存在していた可能性である。関係性は時間の中での展開によって形成されて行く。根源的關係性が始原に存在していて、後発的に論理的な構造を持つ「それ自体」としての自然的世界が出現したという逆の見方もあり得るのではないだろうか。そういった可能性を初めから排除してきたことは、理性的な判断であったのであろうか。

4. 論理は同一性の一貫性に過ぎない

論理的なものの故郷はどこにあったのか。古典ギリシアの世界では、ミュトスの世界から哲学的なロゴスが誕生した¹。ミュトスとは劇的な関係性の世界である。そこでは愛と憎しみの関係性のドラマが展開する。そこには未だ哲学のように自律した知性のロゴスは存在しない。哲学的な論理的ロゴスにおいては、そこに論理的な飛躍があってはならない。継起する思考のプロセスに飛躍がなく、思考の繋がりが順当に推移することが要請されている。もしそこに飛躍があればエラーなのであり、現代の論理的に洗練されたプログラミングでもそうであるように、エラーがあれば論理的計算のプロセスは止まってしまう。現代では、複雑なシステムがエラーなしで作動しさえすれば、生命の相互関係性をも再構築できるようになると考えられている。

しかし同一性を基調とするシステムは、元来「無関係性」の世界である。計算システムによって生命の関係性を再構成したとしても、高々「無関係性」の世界から再構成しているに過ぎない。言い換えるなら、そこでは関係性を同一性から作成しているのである。

5. 同一性の一貫性から関与的態度の一貫性へ

同一性を基調とする「それ自体」の論理は、対話的な関係性とは異質である。論理は「それ自体」の同一性の一貫性だが、対話的な関係性では関与的態度が一貫する。関与の一貫性は論理を越えることもあり得る。論理的な一貫性が行き詰まった場合には、それを論理の内部から修復することはできない。しかし、「それ自体」的世界の外側からの肯定的関与によってそれが補完されれば、論理的な破綻は繕われうる²。だがたとえそうだとすると、外側からの肯定的関与というものがどこから来るのかという疑問は、もちろん残ることになる。

外側ということで実体的な外部存在を想定することはできない。実体的な外部存在は世界に組み

込まれ得る。そうなればそれは結局世界の一部になってしまい、もはや外部ではない。

とすれば、自由に肯定的に関与する外部存在は、あらゆる意味で、この世界を越える超越性でなければならない。超越的存在は実体的存在ではないので、もちろん人間と同じような知的生命体ではない。同一性の論理的世界を繕い上げるのは、真の超越的存在であるとしなければならない。一切を越える超越性のみが根源的關係性の源となり得るのである。

6. 言語的肯定的根源性と先行性

世界との直接性ではなく、それから離れた外部からの肯定的関与は、間接的なものとしての言語によって表現される。世界の論理的な破れに対して、「Ja」という肯定を宣言するのである。それは破れている世界を根底的に肯定する。言語は自由に法則的世界を越えて、対他的に一貫した肯定を表現する。超越的存在からの「Ja」だけが、本来的な関係性の肯定なのである。

哲学でも存在を「それ自体」として論理的に解明することが主流であったから、存在論から倫理を導出することが困難であった（パトナム、2004）。存在するものが超越的存在からの関与的肯定の下で成立するのでなければ、倫理的関係はやはり無関係性からの導出にならざるを得ないからであろう。

関係性は自由なものがお互いに自由に一貫性をもって関わり合うときに出現する。関わるものはお互いに出鱈目な態度は取らない。お互いに誠意を尽くす態度は言葉で表明する。単なる記号は肯定の意味がないので、肯定は言葉である。

超越的存在の肯定的関与が、根本的な関係性として、一切の同一性の論理を基調とする世界をより根底的に支えているのだとしても、それがどのようにして具体的に実現しているのかを示されなければ、現実的な理論としての意味を持たない。

以下にその可能性の具体的な試論を述べる。

7. 超越的受容面による肯定と言語

論理が根源的な関係性による支えを、本来の関係性である超越的存在からの受容的肯定的関与によって与えられているとするなら、その可能性を具体的に明らかにしなければならない。論理を越える理論は、その可能性を具体的なモデルの形で提示できなければ空論と言わざるを得ない。以下に、論理を包摂することが可能な一般的なモデルを提示する³。

論理を越えるモデルは言語である。論理が言語を支えているのではなく、その逆なのである。

そういった言語の理解を、「場面」ということへの着目から述語本位の日本語文法を提示した時枝誠記の「言語過程説」を参考にして構成してみる（時枝，1941）。

中村雄二郎（中村，1989）は、時枝誠記（時枝，1941）の「言語過程説」における「場面」の重視と、西田哲学（西田，1987）における、主語的なものが述語面としての「場所」においてある、という主張との類似性に注目した。中村は、「場面」において表現されている日本語の在り方が、主語的なものが「場所」においてあると考えた西田の思想と呼応すると考えた。

中村も注視したように、西田は論文「場所」で次のように言っている（西田，1987）。

「判断の立場から意識を定義するならば、何処までも述語となって主語とならないものということができる。意識の範疇は述語性にあるのである。述語を対象とすることによって、意識を客観的に見ることができる、反省的範疇の根柢は此にあるのである。従来のいわゆる範疇は一般者の求心的方向にのみ見られたものであるが、これを逆の方向即ち遠心的方向においても見ることができるのであろう。判断は主語と述語との関係から成る、苟も判断的知識として成立する以上、その背後に広がる述語面がなければならぬ、何処までも主語は述語に於いてなければならぬ、判断作用という如きものは第二次的に考えられるのである。いわゆる経験的知識といえども、それが判断的知識であるかぎり、その根柢に述語的一般者がなければならぬ。」（西田，1987，p.140）

ここで、主語が述語においてあるとは、述語面という超越的受容面があって、そこにおいて主語的なものが受容されていると言い換えてよいであろう。

一方で、中村は、日本語の論理を考える上での有力な手掛かりを、時枝の日本語統辞論から与えられたと述べている。中村は日本語では詞が辞に包まれる関係があることに着目して、次のように述べる。

一方、中村は、日本語の論理を考える上での有力な手掛かりを、時枝の日本語統辞論から与えられたと述べている。中村は日本語では詞が辞に包まれる関係があることに着目して、次のように述べる。

(1) 日本語では、文の全体が幾重にも最後に来る辞＝主体的表現によって包まれるかたちで成り立っているから、大なり小なり主観性を帯びた文が常態になる。

(2) 日本語では、文は辞によって語る主体とつながり、ひいてはその主体の置かれた状況＝場面とつながる。だから、場面による拘束が大きい。敬語の例がよくそれを示す。

(3) 日本語の文は、詞＋辞という主客の融合を重層的に含んでいるから、体験的にことばを深めるには好都合であるが、その反面、客観的・概念的な観念の世界を構成するのには不利である。

(4) 日本語の文では、詞＋辞というその構造によって、第二人称はおろか第一人称の主語も、客体化され概念化された詞となり、真の主体は辞のうちに働きとしてだけ見出されることになる。したがって、文法上での形式的な主語の存在はあまり重要ではない。（中村，1989，pp.190-191）

中村はさらに続けて述べている。「したがって時枝の所説は、期せずして西田の〈場所の論理〉を日本語の統辞論において明らかにしたことになる。いま期せずしてと言ったが、時枝が〈場面の支配〉を説いたとき、西田の〈場所の論理〉がその念頭にあったのではなかった。それだけにこの符号は注目に値する。」（中村，1989，pp.192-193）

時枝の「場面」と西田の「場所」の考え方を組み合わせつつ考えて行くと、言語が論理を越えて行く可能性が見えてくるのである。

述語においてあるというのは、主語的なものが述語面に受容され包まれるのだと言える。日本語

では、そういった側面が詞と辞の関係にあるように強く出ている。述語が受容面でもあるという点に注目すれば、日本語のように述語性が強い言語は、受容という関与的關係性を表現するのに適していると言える。

英語のような西洋の言語が主語的同一性の論理性を重視するのに対し、日本語は述語的な受容性を重視するのだとも言える。ここで言語の持つ表現の可能性の広がりを見直してみると、言語は主語的同一性の論理の雛形にも述語的受容の一貫性の母体にもなり得ることが分かるのである。

そこからして、論理をも支えて行く超越的受容面の一般的なモデルを、同一性の論理をも受容的關係性をも共に包含しつつ表現できる言語において見いだせることが分かるのである。

8. 生きたモデルとしての言語

一切の存在の組み立てのモデルとしては、同一性の論理ばかりか受容的關係性をも内包できる言語の方が、同一性の論理しか表現できない論理的構造よりもはるかに一般的な広がりを持った存在のモデルとして成立する可能性がある。

これは、現実の日本語や英語などが存在のモデルになると言っているのではなく、言語に現れている「在ること」の組み立てを表現する力が、同一性の論理が存在を表現する力を凌駕しているのである。言語を参考にして「存在すること」の組み立てをモデル化することが出来れば、上に述べたような「それ自体」として「無關係性」を基調とする自然的世界を越えて、超越的受容面との関わりをも含んだ、より包括的で全体的な一切の存在のモデルを作成していく可能性が出てくるのである⁴。

言語的なモデルは物理的な自然的世界の生成をも包含し得るものと思われる。まず一切の他なるものを受け入れる受容面があり、そこにおいて位置のみの存在点が生まれ、それが受容されながら広がりを持ち始めるとする。存在点は広がることで、質量と空間性を持ち始めまた同時に時間の流れをも産む。そこから質量と空間と時間が生成す

る。受容面は受容するものとして、そのように物理的世界の生成すら表現して行く可能性を持つ。

一貫性は成長したのだと言えるのかもしれない。まず言語的な一貫性があつたとすれば、はじめの言語は“Ja”であり、根源的肯定であつた。言語的構成が成長して行くにつれて、論理的構成が出現したとも考えられる。言い換えるなら、一貫性の原点は対面的な受容的言語の一貫性であつたのだが、そこから次第に自律的同一性の言語關係が出現したのではないだろうか。

現実の言語はもちろん、人間が進化の中で獲得した能力であると言える。したがって、現実の言語が原初まで遡る一切のモデルとなるのではない。そうではなくて、言語の持つ表現の可能性の広がり、論理的な思考を基盤に据えた存在論をも自然科学をも心理学をも越えていく、より一般的で根本的な理論的モデルの発想の手がかりを与えてくれるのである。論理を洗練させて誕生したコンピュータをモデルとする心理学は、存在への漸近線にすぎなかった。曲線としての生命でもある人間存在のモデルは、たとえ論理が破綻してもそれすらも支えて行く超越的受容をも包み込むモデルでなければならない。それは、生きていることを通してわれわれが使っている言語の持つ豊かさからのみ汲み出してくることができる。それは生きたモデルなのである。

ヨハネはそのモデルをすでに知っていた。

「はじめにことばがあつた。」と彼が言っているからである。

注

¹ 川島重成名誉教授との個人的な会話による。(2019年7月20日、ペディラヴィウム御殿場)

² チューリングマシンの停止問題やゲーデルの不完全性定理によって、どんなに論理的に厳密なプロセスで思考を進めても、それが不完全である可能性が示された。そういった場合の論理の破れは、最終的には超越的肯定的関与がなければ修復できないであろうというのが、私の立場である。

³ 1982年の秋頃に University of British Columbia で、筆者は、当時の指導教授であつた Anne Treisman 教授から関心のある心理学の分野について質問をされた。私は、「認知心理学には関心があるが、情報処理心理

学というものにはあまり興味が湧かない」という趣旨の答えをした。すると彼女は私の思いをすぐさま察して、「コンピュータというのは現在の心理学のメタファだが、それ以前では電話交換台が心理学の主なメタファであった。だから、これからも同じような変化がないとは言えない。」という趣旨の返事をして下さった。その時以来、私は密かにコンピュータに代わる新メタファはないものだろうかと考え続けてきた。その兆しは、私が人称の概念に着目した際に萌芽的なものが見えたように感じた。この論文では、拙い形ではあるけれどもより具体的にコンピュータに代わる新しいメタファを示し得たのではないかと思う。今振り返ると、Treisman教授は実に自由な思考をする大変優れた教師であったと思う。

⁴ 述語性への着目は西田幾多郎も持ったのだが、彼はそこから哲学的論理的考察を越えて行く言語の可能性へと視点を移動することはなかった。西田は「場所の論理」に拘った。それは西洋的な論理とは異なるが、やはり彼にとっては「論理」なのである。西田の述語的な論理は、「絶対矛盾的自己同一」という言葉によく現れているが、絶対矛盾が自己同一であるということは、論理ということの一般的な理解から懸け離れている。場所が矛盾をも包み込むのだということを、論理的な形で表現したのであるが、それだと矛盾と受容面である場所が直接的に重なり一致してしまっている。つまり、受容される側と受容する側が一体なのである。そのように理解してしまうと、超越的受容面というものが、根本的には関係性の源であるということが曖昧になり、自己において自己の受容がなされるような誤解を生む。そうなると問題は、どこまでも自己の問題、自己の探求ということになる。すなわち、関係性ではなく、自己の内部に特殊ではあるが、ひとつの論理的なまとまりがあることになり、それによってひとりで悩みひとりで解決するという形になる。その解決が論理的に保証されているということになれば、西田のいう「平常底」という一種の安定感も、その保証は自己が強く「場所の論理」を把持していることが前提になる。すると、哲学はそのいわば東洋的な論理が確実であるという一種の信念に近い思いを、自己がどこまで維持できるのかという修行のようなものに近づいて行く。しかし、本来超越的受容とは、まったく論理的なことではなく、自己とは離れた超越者が自由にそれ自身の意志から他を肯定するのであって、論理とも自己の深い探求とも何の関係もない。西田の問題性は、彼が「論理」に拘ったことなのである。もしも西洋の主語的な論理に対して東洋の述語的な論理という形で、「論理」という舞台の上での対決をしようとするなら、その対立そのものをどうやってひとつの全体的なものへと統一できるのかという、さらなる論理の問題が出てくる。おそらく山内得立が『ロゴスとレンマ』で探求したのも、いわば東洋の論理と西洋の論理を同じ土俵に載せて、統一を図ろうとしたのではないだろうか（山内，1974）。中沢新一は、『レン

マ学』で、山内のレンマをさらに独自に展開しようとしているが（中沢，2019）、要するに中沢も、論理という概念の呪縛から逃れてはいないのである。論理に拘れば、それは結局同一性への拘りになり、主語的同一性であろうが述語的同一性であろうが、同一であるものすなわち自己への拘りになってしまう。ところが、根本的な関係性というものは、他者に対して誠意を尽くすということであるから、自己へのこだわりは持たない。始原での根源的な超越的受容が“Ja”であるのは、それが論理ではなく、内容と意味を持った一語であることから分かるように、一語の持つ意味内容によって自由に他者を肯定することを表明しているだけなのである。以上の考察から、私は、西田の「場所」に着目しつつも、その論理への拘りを捨てて、むしろ、言語の持つ可能性へと眼を転じることにする。自由な関係性における受容性とは、論理よりももっと根源的なのである。これらすべての事情を余すところなく表現できるモデルは、言語以外にはないのではないだろうか。

引用文献

- デネット C ダニエル (2018). 心の進化を解明する パクテリアからバツハへ 青土社
パトナム ヒラリー (2004). 存在論抜きの倫理 法政大学出版局
山内得立 (1974). ロゴスとレンマ 岩波書店
山本周五郎 (1964). 柳橋物語・むかしも今も 新潮社
時枝誠記 (1941). 国語学原論 岩波書店
西田幾多郎 (1987). 場所・私と汝 他六篇 西田幾多郎哲学論文集Ⅰ 岩波書店
中村雄二郎 (1989). 場所 (トポス) 弘文堂
中沢新一 (2019). レンマ学 講談社
藤田和生 (2007). 感情科学 京都大学学術出版会